

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 5 月 31 日現在

機関番号：32406

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2016

課題番号：25870823

研究課題名(和文)台湾原住民族社会可視化の影響の複雑性の解明：戸籍、地図、その記載情報の研究

研究課題名(英文)The Influences of State Project of Legibility to the Indigenous Peoples of Taiwan

研究代表者

松岡 格 (Matsuoka, Tadasu)

獨協大学・国際教養学部・准教授

研究者番号：40598413

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：戦前・戦後の国家的統治が台湾の先住民族社会に与えた影響を、統治者による地域社会の可視化をキーワードにして調査し、そのプロセスとそれが社会に与えた影響についての実証的な研究を行った。本研究で重要視したのはその可視化の影響について詳しく検証することである。その影響関係は、必ずしも統治者による統治対象社会に対する一方的な影響関係とは限らず、さまざまな影響関係がある得る。本研究では戸籍や地図など公的書類やその記載情報について調査することで、実際にそのような複雑な様態が観察されることを実証的に確認することができた。

研究成果の概要(英文)：In this project, I researched about the influences of the state project of legibility to the Indigenous peoples of Taiwan after the end of 19th century. What I want to examine is the process of the projects of legibility conducted by the two governing authorities (the Empire of Japan and the KuoMingTang Regime), and the influences imposed by these projects. And what I think most important to do this is examining the detail of influences, Because I think the influences should be not simple. Actually through this research project, it is revealed that the vectors of influences and relationship between influences are complicated. I explained the many kinds of complexity through example of official documents, and some kinds of informations written on those documents.

研究分野：地域研究、文化人類学

キーワード：地域研究 文化人類学 マイノリティ 可視化

### 1. 研究開始当初の背景

研究代表者は台湾の先住民族(台湾では一般に台湾原住民族と呼称されている。以下では(台湾)原住民族と表記)に関する調査を行ってきており、歴代の台湾統治者(大日本帝国・中華民国)が台湾原住民族に対して行ってきた政策が原住民族社会に与えた影響について研究してきた。

その研究成果をまとめた博士論文に加筆・修正した形で2012年に『台湾原住民の地方化：マイノリティの20世紀』を公刊した。

上掲書で100年近くにわたる原住民族政策に対する主な分析キーワードとして挙げたのが「地方化」であったが、その後研究を進めることでやはり同書内で分析概念として用いた「可視化」についてさらに掘り下げて研究する必要性に気づかされた。

「可視化」というのはいわゆるvisualizationの意味ではなく、ここでは地域社会の状況を統治者にとって見えやすくする(あるいは読み取りやすくする)方向に役立つような、統治者が統治対象社会に対して用いる統治技法やそのツールを指す用語として用いている。地域社会の住民一人一人の情報を全て掌握するというのは一方では夢物語に過ぎないとも言えるが、一方では統治には地域社会の情報が「見えている」という状態が必要となることも確かである。言い換えれば、近代国家的統治においては必ず地域社会の状況を単純化し、一覧できるような情報として読み替えていくためのツールを開発する必要性が生じる。ジェームズ・スコットによれば、近代国家の統治の初期の段階で必ずこの可視化の過程が必要となる。

地域社会の変動過程を明らかにするに当たってこの可視化の影響の分析は重要な意味を持っていることは明らかであり、台湾原住民族社会においても同様である。

地域社会可視化の一事例としての台湾原住民族社会可視化の過程を、戸籍・地図などの公的書類を例として検証するという着想を得て、本研究計画実施の出発点に立った。

### 2. 研究の目的

台湾を例として、近代国家による統治が先住民族社会に与えた影響についての研究を深めることが本研究の研究目的である。具体的には、上述のような国家による台湾原住民族社会の可視化の過程について戸籍や地図の例で検証し、その過程が社会に与えた影響の複雑性について考察を深め、国家・先住民族関係の問い直しを行うことを目標に研究を行った。

### 3. 研究の方法

台湾現地での調査を中心に調査・研究を行った。調査の主な方法は図書館・アーカイブでの文献収集および台湾原住民族居住地域でのフィールドワークである。フィールドワ

ークの主な構成は観察・記録調査、聞き取り調査、資料収集である。

### 4. 研究成果

まず、上記のような国家統治者による地域社会可視化の具体的展開について、台湾原住民族の事例について調査・研究を通じて実証することができたことが重要な成果である。

そして、これと関連したもう一つの重要な成果として、その可視化のプロセスが地域社会に与えた影響の大きさについて、原住民族の事例をもとに明らかにすることができたことが挙げられる。

上記の可視化の展開を考える際に、台湾原住民族を対象とするそれについては、戦前の台湾、つまり大日本帝国統治下台湾の状況がキーとなる。本研究において研究代表者は、日本による植民地統治に含まれる、台湾原住民族に対する統治政策の中で、可視化のプロセスが存在したことを実証的に確認することができた。

この実証的な検証を通じて、可視化の影響を考える際に重要なポイントも浮かび上がってきた。それ以前に台湾を統治していた清朝も可視化政策を実施しようという動機と計画は持ったようであるが、影響はごく限られたものであった。つまりその意味で日本統治時代における可視化のプロセスは原住民族社会の変化にとって決定的に重要な意味を持っているということである。このことは台湾原住民族社会の変動過程の解明を目指す研究代表者にとって重要な点であるが、同時に(台湾原住民族居住地域という文脈を超えた)より一般的な意味でも重要である。というのはこのことは可視化が被統治地域社会に与えた影響が大きいことを実証する事例でもあるからである。

その可視化の起動の具体的展開について見てみると、大日本帝国による統治が始まってすぐに台湾原住民族可視化のプロセスが動き始めたわけでは決してなかった。台湾原住民族社会可視化展開の画期となったのが1910年代である。この時期に植民地当局が原住民居住地域の実効支配を確立するとともに、この地域の土地の測量・地図作成などを実施し、土地に対する可視化を実施した。その後が続いたのが地域住民に対する可視化であり、その可視化の重要なツールとなったのが戸口調査簿などの公的書類であった。原住民族はここに姓名・住所をはじめとする情報を登録されていくことになる。こうして土地と人に関する情報を掌握することによって、統治者は地域社会の可視化を達成していったのである。したがって原住民族社会可視化の初期段階において、戸籍編成と地図作成はやはり重要な役割を持っていたということである。言い換えれば、国家統治者による地域社会の可視化において、戸籍・地図などの公的書類が重要な役割を果たしたことを、原住民族の事例で確かめることができた、

とも言える。

このように地域社会可視化のプロセスについて、他地域でも検証可能な一般的な部分について、台湾原住民族の事例について検証することができた一方で、台湾原住民族可視化に特徴的な点についても明らかにすることができた。まず、既述のように、台湾原住民族（現地住民）の多くにとってこのようなプロセス（国家による可視化ツールの展開）との遭遇は初めてのことであったと考えられる。したがって極めて大きな影響を与えたと考えられる。

次に統治体制が特殊であった点が挙げられる。漢民族が多く住む台湾の「平地」は日本の統治が進むにしたがって普通行政区画へと編入されていった。「普通行政」とは言っても、「内地」（日本本土）並の地方行政が行われたわけではない。だが少なくとも漢族居住地域についての地域統治はある程度地方行政機関が行うことになった。しかし原住民族居住地域についてはその「台湾の地方行政機関」さえ置かれることはなく、代わりに警察機関が統治を行った。そして、日本統治時代が終了する 1945 年に至るまで、結局のところ原住民族行政が普通行政に統一化されることはなかった。原住民族居住地域において可視化政策を担ったのは、この特別行政機関としての警察であった。したがって既述の公的書類を取り扱うのもこの警察機関であった。

上記二点ともかかわるが、統治開始から実効支配確立、そして可視化プロセスの開始という流れが、平地に比べて原住民族居住地域は 20 年ほど遅れて進行したという点も重要である。このことは、例えば（大日本帝国レベルの）公的書類の扱いの差となって現れ、またそのことはさらに婚姻関係や家族関係に影響を与えた。

そしてこうした点は、戦後の原住民族統治と原住民族自身の生活にも大きな影響を与えた。一つにはこれは、公的書類における原住民族個人に関わる情報が日本統治時代に遡る、ということの意味する。日本統治時代に収集された可視化データが、戦後台湾の国民党政権に引き継がれたからである。

特殊統治（一般地方行政と区別した形の統治）の影響も明らかである。戦前の警察統治は戦後に「山地統治」として引き継がれた。そしてその「山地」に住む原住民族は、国民一般と区別される特殊なエスニック・グループとしてとらえられることになった。戦前（日本統治時代）の台湾において、先住民族概念やエスニシティ観念についての認識が現在の世界で一般的になっているような形では意識されていなかった。しかし、戦前の特殊統治がこのような形で台湾における現代のエスニシティ認識の形成へと大きな影響を与えたと考えられる。平地との統治過程進捗の時間差も、このような状況に寄与したと考えられる。

戦後の国民党政権による原住民族可視化は、このように日本統治の可視化データを再利用することで効率的に行うことができたと考えられる。ただし、戦後独自の状況についても考えなければならない点がある。

まず、戦後政府は日本統治時代以来の可視化データをデータとしてはそのまま引き継いだと言えるが、一方で形を変えて利用した。公的書類に書かれた姓名や地図に書かれた地名がよい例である。例えば日本統治時代後半の公的書類（戸口調査簿）に書かれた原住民族の姓名の多くは日本人風の名前となっていたが、戦後政府は同じ人物の名前を今度は漢族風（いわば中国人風）につけかえて登録した。つまり登録データを軒並み書き換えていったのである。もちろん登録住所なども中華民国バージョンの名称に書き換えていった。地図や地籍図などに記載された情報についても同様なプロセスが見られた。データとしてはそのまま再利用するが、統治者の文化にもとづいて上書きして引き継いでいくという形である。

以上のように、本研究では可視化の展開およびその影響について実証的に明らかにし、かつ原住民族地域における特徴を明らかにしてその影響まで検証することができた。

こうした成果をふまえて、本研究においても一つ達成を目指した点がある。その影響の複雑性を明らかにすることである。このような戦前から戦後にかけての可視化のプロセスが原住民族社会に与えた影響は単純ではないだろうということは自著『台湾原住民族社会の地方化』の執筆段階でも感じており、一部内容にも反映した。したがって研究計画でも課題でテーマとして掲げたわけであるが、研究開始段階では半ば仮説であったこの点は、本研究で十分に確かめることができた。

二度の外来統治者によって二度にわたって可視化のプロセスにさらされたが、どちらの文化も原住民族にとって無縁の、外来文化に基礎をおいたプラットフォーム上で行われた。まずこの点から言って、影響関係が複雑である。

外来文化からの強い影響が原住民族社会を覆う形が、二つの時代において重なるようにして見られたのである。これは可視化が地域社会に与えた影響の複雑さを示す一つのパターンであるが、これが特に影響の重層性を示すものだとすると、これに対して戦前と戦後の可視化の影響が複雑な形からみ合うようなもう一つの形の複雑性が見られた。

戦前の日本統治においても、戦後の国民党政権においても、原住民族の身分情報を記載した公的書類を作成した目的は地域社会の可視化にあった。しかし、台湾における先住民族運動（原住民族運動）、文化復興、政府による多文化主義採用などの動きを受けて、原住民族がいわゆる先住民族として台湾社会内部で公認されるようになると、今度は誰が先住民族なのかを確定（確認・認定）する

必要性が生まれた。その時に根拠となったのが戦前から戦後に引き継がれてきた公的書類であった。

その公的書類はもともと先住民族の身分の根拠とすることを第一の目的として作成されたわけでは決してない。原住民族の身分関係が記載された公的書類の作成は、既述のように日本統治時代に遡るが、それは可視化を目的として作られたのである。しかし上記のような時代の変化を受けて、異なる目的で再利用されることになったのである。特に日本統治時代の公的書類が記載した情報は、出発点として極めて重要な意味を持っているのである。

この原住民族の「身分」と関わる原住民族の「姓名」についても同様の、しかし少し異なるもう一つの複雑な影響関係が見てとれた。現在の台湾では、原住民族運動や多文化政策や文化復興の影響を受けて、原住民族は自らの母語でつけた独自の名前を選び取れるような環境が整えられつつある。だがそうした状況にあっても、原住民族が原住民族独自の命名を行うに際してはかなりの困難が伴う。一つには、長い間にわたって外来文化による名付けが行われてきた結果、原住民族独自の伝統姓名がどのようなものであったのか、原住民族自身にとってさえ手がかりになるものが少なくなっていたという点である。そこで利用されることになったのが、公的書類に記載された情報（ここでは姓名）である。もともとは戦前に可視化のために用いられた公的書類の記載情報が、現代において原住民族にとって自民族の文化に則った名付けを行う際の根拠資料がという、極めて複雑な影響関係がここでも見られるのである。先住民族身分認定と姓名について異なっているのは、原住民族の伝統姓名の手がかりになるのは、戦前の公的書類に記載された姓名に関する情報のみであったという点である。戦後の公的書類にはそうした情報は引き継がれなかった。

また戦前の公的書類、地図、そして統計などに記載された別の記載情報（エスニシティ）も戦後の台湾社会に（エスニック・イメージーションという形で）大きな影響を与えていると考えられる。これについては本研究で考察・指摘することができたが、実証的検証についてはさらなる調査・研究が必要になると思われる。今後の研究課題の一つとして考えている。

以上述べてきたように、戦前と戦後の可視化の展開と、その影響を関係の複雑性について、調査・研究を通して明らかにできたことは重要な成果であった。

#### <引用文献>

郭俊麟主編『台湾原住民族歴史地図集』（台湾原住民族委員会、2016）  
Scott, James C. 『Seeing Like a State』（Oxford University Press、1998）

台湾総督府警務局（編集・発行）『理蕃誌稿全四巻』（青史社、1989（復刻））

松岡格『台湾原住民社会の地方化 マイノリティの20世紀』（研文出版、2012）

#### 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計2件）

松岡 格、「台湾原住民と姓名・住民登録・エスニシティ 可視化と公的書類と社会の関係研究」『マテシス・ユニウエルサリス』第16巻第2号、査読無、2015年、pp.23-39

松岡 格、「可視化のためのツール、ユニット、エージェント 戦前の原住民に対する統治とその影響について」『民族学界』第33巻、査読有、2014年、pp.81-106

〔学会発表〕（計3件）

松岡 格、「多文化時代の文化実践と国家・民族」研究ワークショップ「マイノリティの文化実践と現代社会：台湾原住民の例を中心に」（獨協大学（埼玉県）、2016年12月10日）

松岡 格、「台湾社会の可視化とエスニシティ・姓名 書類作成・記載事項とその影響」エスニック・マイノリティ研究会ワークショップ（早稲田大学（東京都）、2015年12月12日）

松岡 格、「台湾のエスニシティと身分登録 可視化・書類・カテゴリー」研究ワークショップ「エスニシティと身分登録 事例と討論」（獨協大学（埼玉県）、2015年7月18日）

〔図書〕（計1件）

日本順益台湾原住民研究会編、『台湾原住民研究の射程 接合される過去と現在』（「日本統治下の身分登録と原住民 制度・分類・姓名」担当）（順益台湾原住民博物館）2014年、総ページ：400（担当部分 pp.33-75）

#### 6. 研究組織

(1) 研究代表者

松岡 格 (MATSUOKA, Tadasu)  
獨協大学・国際教養学部・准教授  
研究者番号：40598413